東京新聞
2012年（平成24年）8月10日（金曜日）　11版　4

東北復興日記 1

皆と土に触れ励みに

ＮＰＯ法人
「ザ・ピープル」
吉田恵美子理事長

真夏の日差しの下、川風を受けて笑いさざめくようにコットンの葉が揺れています。福島県いわき市の中ほどを流れる夏井川。その河川敷に「いわきオーガニックコットンプロジェクト」の栽培地のひとつ、木田（きだ）ファームがあります＝写真。

プロジェクトは東日本大震災後苦境に立たされているいわき市の農業を再生する試みの一つとして、昨年十二月から本会が主催し動きだしました。いわき市の農業は、震災以前からも後継者不足による耕作放棄地の増加という悩みを抱えていました。そこに追い打ちをかけた福島第一原発事故による放射能汚染と風評被害。農業に真剣に向かい合っていた人ほど、大きなダメージに見舞われています。

市内十五カ所おおよそ一・五㌶ほどの畑で、市民や双葉郡からの避難者、そして首都圏からいわきの農業を応援しようと駆けつけてくださるボランティアの方たちも一緒に、農薬や化学肥料を使わずに栽培しています。東京のオーガニックコットン製造・販売会社アバンティも協力しています。秋冬に収穫し、来年六月ごろTシャツができる予定です。

木田ファームは、農作業による障がい者のメンタルケア「園芸療法」を実践する農場として七年前に開設されました。しかし原発事故後、働いていた障がい者は「いわきは危険だ」と家族に呼び戻され、有機栽培の野菜も販路が狭められ、苦しい経営を強いられています。

今は、近くに建設された大熊町の仮設住宅から約十五人の女性たちが車に乗り合わせてやってきて、野菜をつくっています。コットンの栽培も手伝ってくれています。楽しみは一仕事終えた後のお茶の時間。丹精した野菜でつくった自慢の漬物の数々が並びます。皆と一緒に土に触れ農作業することが励みになっているのだそうです。

この連載は、東京のＮＰＯ法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

東京新聞
2012年（平成24年）8月17日（金曜日）　11版　4

東北復興日記 2

被ばくの不安 和らげる

NPO法人
「ザ・ピープル」
吉田恵美子理事長

「いわきという低線量被ばく地で暮らすストレスを減らすためにここはあるのです」。いわき放射能市民測定室「たらちね」事務局長の鈴木薫さん(四六)は、施設を訪れた視察グループを前に、穏やかな口調でこう語り始めました。

ここは、福島県いわき市小名浜の街中にあるビルの三階。昨年の十一月から民営の放射能測定室が開設され、食品や土壌の放射能測定とホールボディーカウンターによる全身放射能測定が行われています。

福島県内では空間線量が比較的低めに推移しているといわれているいわき市。しかし、小さなお子さんをお持ちの親御さんなど、食品を通しての内部被ばくを懸念する市民は少なくありません。

鈴木さんご自身は放射線関係の専門家ではありませんでしたが、放射能汚染に関する情報が十分に提供されないという市民の不安を払拭したいとの思いで仲間と共に動きだし、ここまでこぎ着けたのでした。

持ち込まれる検体は日に二十品ほど。家庭菜園で栽培された野菜のほか、釣り人が持ち込む魚などもあります。これまでに二千七百検体の食品と三百検体の土壌のチェックを行ってきました。

また、ホールボディーカウンターでの測定も三千人分のデータを残しています。

いわき市の支所に放射能測定器が配置されるようになった今でも、線量チェックを求めてここを訪れる人は絶えません。

全てのデータをきちんと公表するという基本姿勢が評価されているのでしょうと鈴木さんは話します。

「一つの数値に対する考え方はさまざまです。全てを自分が選択しなければならない難しさがここにあります。放射能汚染は、自然、身体だけでなく、家族も壊したという方がおられますが、まさにそういうことが起きているのです」

「たらちね」では、ここを訪れる人々の不安に寄り添い情報を共有することで、いわきに暮らす一人ひとりを支えていこうとしています。

訂正　10日付第一回の「東北復興日記」の写真は「木田ファーム」ではなく「木紅木（きくもく）ファーム」でした。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

東京新聞
2012年(平成24年)8月24日(金曜日) 11版 4

東北復興日記 3

自然エネの街灯ともす

NPO法人
「ザ・ピープル」
吉田恵美子理事長

福島県いわき市の北端、久之浜町の太平洋に面する地域は津波とその直後に発生した火災により町の多くを失いました。しかし、危うく難を逃れた人たちは住み慣れた場所から立ち去り難く、ガレキが片付けられたころから町に戻り、残された家屋に手を加えながら生活を再開し始めました。日暮れ後、かつての日常を求めて外に目をやると、眼前に広がる暗闇が気持ちをなえさせるといいます。

そんな話を耳にしたNPO法人インディアン・ヴィレッジ・キャンプの島村守彦さん(五四)たちは、ソーラーパネルを手作りする講習会を開催し、久之浜の町に街灯をともすことを計画しました=写真。

もともと、自然と共生するインディアンの暮らしに共鳴し、エネルギーの自給自足を市民レベルで進めようとしていた島村さんたちに、原発事故は、エネルギーをもう一度自分たちの手に取り戻すべきだとの警鐘として響きました。電力会社任せではない、市民自らがエネルギーを生み出す動きを丁寧につくる必要があると痛感したといいます。

講習会会場のいわき明星大学の教室には、さまざまな年代の参加者が二十人ほど集まりました。中には久之浜町や仮設住宅で生活している参加者もいました。そして、参加者の名前が書き込まれた六十ミリ角のソーラーパネルが六枚出来上がり、久之浜の町には二つのソーラー街灯がともりました。

福島県は全国でも六番目に再生可能エネルギーのポテンシャルが高い県です。なかでもいわきは太陽光、風力、温泉熱など豊富な資源があります。

目下島村さんは地域の人たちと自然エネルギーで発電する〝いわきコミュニティ電力〟をつくろうと準備を進めています。私も協力しています。

久之浜の街灯は、いわきから市民レベルでエネルギー転換を図る活動の灯台となることでしょう。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

東京新聞
2012年（平成24年）8月31日（金曜日）　11版　4

東北復興日記 4

アジアの学生と交流

ＮＰＯ法人
女子教育奨励会
（ＪＫＳＫ）
大和田順子理事

「震災後、東京の大学を退学し、ふるさとの復興に尽くしたいと福島の大学に入りなおした学生には驚きました」。いわきスタディーツアーに参加したアジア女子大学（ＡＵＷ、バングラデシュ）の学生の感想です。

ＪＫＳＫは国籍の異なるアジアの五人の学生に奨学金を出していますが、七月の一カ月間インターンシップ（就業体験）プログラムを行い、その一環として一泊二日のいわきツアーを七月下旬、「ザ・ピープル」や「ふよう土２１００」という、二つの地元のＮＰＯ法人との共催で実施しました＝写真。福島の大学生、いわき市民との交流を通じ、コミュニティーの再生に取り組む地域の人たちの努力に一同胸を熱くしました。

初日は津波被害を受けた町や仮設住宅の訪問、いわき放射能市民測定室で内部被ばく測定、地域の伝統芸能である「じゃんがら念仏踊り」の鑑賞、温泉、交流会。二日目は遠野地域のオーガニックコットン畑の草取り、地域の人たちとのバーベキューなど盛りだくさん。心と身体でいわきの今を体感しました。

朝採りの新鮮野菜やお肉が炭火で焼ける間、農家の折笠茂子さんにお聞きしたこと。中山間地域にある折笠農園では震災前は都市農村交流に力を入れていましたが、震災後その交流も途絶え、遊休農地が増えていく中で何とか活路を見いだしたいと、オーガニックコットンプロジェクトに参加したそうです。

ワークショップではＡＵＷの学生は、それぞれの国で性別、貧富、身分制度などさまざまな格差に直面しながら、何とか社会を変えたいと志していることを。福島の学生は原発事故による風評被害など差別的な扱いを受けていることを発言。命を大切にし、平等で格差のないサステナブル（持続可能）な社会を共につくっていってくれるに違いありません。

この連載は、東京のＮＰＯ法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

東京新聞
2012年（平成24年）9月7日（金曜日）　11版　4

東北復興日記 5

生涯かけ 子ども支援

「一ノ蔵」
マーケティング
室長
山田好恵さん

漆黒の闇に白い雪が降りしきる。眼前に現れた津波地獄絵の石巻の街に立ちすくみながら、私の頭の中にあったのは娘の安否だけでした。

「今日は卒業式の準備が終わったらお友達の家に遊びに行くね」

震災の日の朝、私に楽しげに話しかけた娘は今どこにいるのか。会社のある宮城県大崎市から石巻の自宅に急ぐ私の目に飛び込んできたのは、わが家のある方面が闇夜に不気味な炎を上げている光景でした。

震災は、平日の昼でしたので、多くの親子が別々の場所にいて、子どもを亡くした親や、親を亡くした子どもたちが大勢いります。突如降り掛かった悲しみと不安を思う時、わが子が無事だった分なおさら何かしなければ

ばという気持ちが湧きあがりました。

私が働く酒造会社「一ノ蔵」は、内陸部にあるため津波は免れましたが、仕込み蔵をはじめかなりの損害を受けました。しかし、多くのお客さま、お取引先さまから温かいご支援を頂き、約四十日後には仕込みを再開することができました。社内ではご恩に報いたいという声が上がり始めました。

まず、毎月の給料から個人で寄付をし、同額を会社が寄付をするマッチングギフト制度に震災孤児をサポートする「東北レインボーハウス」建立への支援を加えました。

次いで、ふるさとの将来を託す子どもたちを支援する「未来へつなぐバトン」という企画商品を今年三月末に発売しました＝写真。その売り上げの全額を被災した子どもたちのために設立された「ハタチ基金」へ寄付することにしました。寄付は今後二十年続きます。

震災の記憶が風化しつつある中、生涯忘れ得ぬ体験をした者として、私は支援活動を会社員として、そして自分のライフワークとして生涯続ける覚悟を決めました。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

東北復興日記 6

ともに歩む「プチ市民」

藤間千尋・石巻災害復興支援協議会広報室長

昨年の五月の連休、友人が活動していた宮城県石巻市に初めて災害ボランティアで入りました。その後、深く関わりたいと強く思い、会社を辞め十月に横浜から移住しました。ボランティアや視察ツアーの受け入れなど、あっという間の一年でした。

「市民大座談会～プチ市民とともに復興する石巻～」で、八月五日、石巻市民とボランティア、合わせて二百人以上が集まり、活発な議論が交わされました＝写真。

「プチ市民」とは、石巻の復興に〝ちょこっとでも＝プチ〟関わりたいと思ってくださる方々のこと。いわば復興を見守る「応援団」。私は「石巻ファンクラブ」ともひそかに思っています。

石巻では、延べ二十七万人以上のボランティアが活動しました。多くのボランティア経験者や、石巻に関心を持ってくださる方とともに、復興に向けて歩んでいこうという思いから、震災後に地元の方が立ち上げた「コンパクトシティいしのまき・街なか創生協議会」で、生まれた考えです。

「プチ市民」になる方法など、現在準備中です。石巻には、震災の三年前に作られた心温まる「市民憲章」があります。大座談会の終わりに、この市民憲章を基に、震災発生直後から活動を続けている団体の方が作成した、「プチ市民憲章（仮）」が発表されました。

〈プチ市民憲章〉

まもりたいものがある
それは日々のいとなみ
みんなのくらし
つたえたいものがある
それは被災地の復興
石巻の魅力
たいせつにしたいものがある
それは人の絆、
感謝のこころ
わたしたちは石巻と共に
歩んでいく
共につくれたらいいな
輝く未来

ぜひ、皆さんも「プチ市民」の一人になりませんか。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

東京新聞
2012年（平成24年）9月21日（金曜日）　11版　4

東北復興日記 7

ふるさと再生へ動き

「一ノ蔵」
マーケティング
室長
山田好恵さん

「俺たち五年後はどこにいんだべなぁ」「おらいは復興住宅さ入れんだべが」。仮設住宅に住む人々はそれぞれに深い悩みや不安を抱えています。

経済力あるいは職業を持つ人たちは入居後一年を待たずして、以前の住宅を修繕したり新築して移り始めています。取り残された仮設住民はその引っ越しをみるたびに自分の未来を問うているのでしょう。慰めに大丈夫だよなどとは言えない現実がここにはあります。

震災から一年半が過ぎ、市中のがれきの多くは取り除かれました。しかし、更地となったそこかしこに雑草がぼうぼうと茂り、以前の姿を知る者には痛ましい限りの風景です。石巻の人口は震災前に比べ約一万人も減りました。もちろん、震災による死亡、行方不明者も多かったのですが、職を失い、住む家もないままよそに移った人々も多いのです。

しかし、そんな中にも新しい動きがいくつもみられるようになりました。当地にボランティアや視察に訪れる人たちは多くいて、語り部教育も本格的になりました。市民によるワーキンググループの活動も活発です。新たなふるさと再生のために市民が動き始めているのです。先日、埼玉と長野から高校生がスタディーツアーに訪れ、そのお世話をしました。被災した方々が販売する「縁のミサンガ」を一緒に作る彼らの姿を見て、その思いを新たにしました―写真。私たちの経験を防災・減災に生かしてほしい、そのためにも現場に見に来てほしい、今の私たちを。

私が所属する東北都市学会では、十一月に石巻専修大学にて公開シンポジウム「復興とボランティア活動」と題する大会を開催します。現地見学会や討論会などが予定されています。被災地を俯瞰し、未来の社会をつくる、そのための学びの場として参加してみませんか。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

東京新聞
2012年（平成24年）9月28日（金曜日）　11版　4

東北復興日記 8

記憶よみがえる「きりこ」

南三陸町産業振興課商工観光振興係主査
宮川舞さん

二〇一〇年初夏。「女性がうれしい南三陸へ」をテーマに、地域の女性たちのプロジェクトが始まりました。誰もがその半年後に、町が無くなるような大災害が自分たちの身に降りかかるとは、思いもせずに…。

プロジェクトのアドバイザーで、アートプロデューサーでもある吉川由美さん（五三）は、きりこに着目しました。

きりこは、三陸沿岸部の神社に多く見られ、神職が正月の神棚飾りに半紙に縁起物を切り抜いたものです。地域によってデザインが異なり、はかなくも優しく風になびく様は、実に美しいもので、宮城県南三陸町では一年を通して神棚にこの白いきりこが飾られ、暮らしの一部でもありました。

商店や家々、地域などにまつわる南三陸ならではのストーリーを取材で掘り起こしてきりこを作り、おのおのの軒先に飾りました。地域に愛着を持った女性たちは、「女性がうれしい南三陸」を切り口でさらに実践していきました。

あれから二年目の夏。南三陸のかつての市街地に、再びきりこが姿を現しました。辺りには何もありません。残った家々の土台と一面の雑草。そこに、かつてあった商店のシンボルであるきりこが白いアルミ板で作られ、志津川地区に三十近く点在しています＝写真。

きりこを見た住民たちは口々に言います。「忘れまいと思っても記憶が薄れていくのが怖い。きりこを見て、懐かしい町の記憶がよみがえってきた」「うれしい。本当にうれしい」

二週間で撤去される予定でしたが、住民たちの声により、土地のかさ上げなどが始まるまで、設置を継続することになりました。復興の根底に、いつもこの「町の記憶」が生きていてほしいと願っています。ぜひ一度、きりこを見に来てください。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

東京新聞
2012年（平成24年）10月5日（金曜日）　11版　4

太陽光に希望を託す

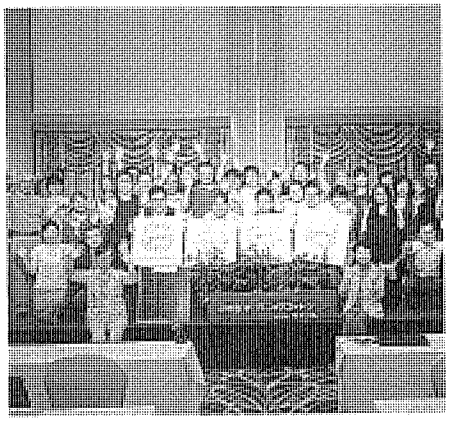
NPO法人
女子教育奨励会
（JKSK）
大和田順子理事

東北復興日記 9

「いわき、明日のこと」と題するフォーラムが、九月二十九日開催されました。ザ・ピープルなど市内の三つのNPO法人でつくる「いわき緑の分権コンソーシアム」が、総務省の補助を得て開催しました＝写真。

緑の分権改革では、農産物や自然エネルギーなど地域の資源を生かすことで、お金が地域に入り、循環することを目指しています。しかし、今のいわきは海はあっても泳げない、魚を捕ることもできない、農産物は風評で売れない、観光客は激減という現実に直面しています。一体どのような地域資源をどのようにいかせば、希望の持てる絵を描くことができるのでしょうか…。

昨年十二月、地元の方々と私たち首都圏の女性たちが話し合う「第二回車座交流会inいわき」で、未来をつくるアイデアをたくさん考えました。その中から生まれたのがオーガニックコットン、復興スタディツアー、そして自然エネルギーの取り組みでした。



フォーラムではザ・ピープルの吉田恵美子さん（五四）は「放射能に汚染された福島だからこそ、命を大切にするオーガニック（有機農法）で綿を植えることにしました」と言いました。続く「いわきコミュニティ電力」と題したトークでは、早稲田大学の岡田久典さんが「市民が出資などで発電に参加し、その売電収入を地域活性化に活用することが重要」と指南しました。

いわき市は東北地方で年間の日照時間が最も長い地域です。太陽光をいかして発電し、綿を栽培する。そして人が集い、輪になり、太陽のように広がって、いわきの明日をつくる。この日は、私たちが「おてんとSUN」プロジェクトと名付けた挑戦の幕開けとなったのでした。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

東北復興日記 10

福興市…未来へバトン

南三陸町産業振興課
商工観光振興係主査
宮川舞さん

東日本大震災は多くの尊い命と共に、先人たちが積み上げてきた多くの財産も一瞬にして奪っていきました。

南三陸町は南三陸金華山国定公園のほぼ中心に位置し、リアス式海岸が織りなす海と山のコントラストが目にもまぶしい景観と、豊富な魚介に恵まれた、小さいながらもキラキラと輝く漁師町でした。

震災当時、町の観光振興を担当していた私は、色彩の失われたその現実を目の当たりにして「もう何もない。何もできない」と、大きな喪失感と不安と絶望を味わいました。そして、多くの避難者を抱える避難所は、生存者の確認や配給業務など、これまでに経験したことのない混乱の連続でした。そんな折、震災以前から観光まちづくりを共に目指してきた地域の商店主の方々が、復興ののろしを上げようと青空市を開催するために立ち上がりました。気持ちの整理がつかずちゅうちょする私に「こんなことで負けてられないぞ！　一日も早く復興するためにみんなで協力するからやろう！」と、背中を押してくれました。

青空市は、「南三陸町福興市」と命名されました。全国の商店街の皆さん、企業、そして多くのボランティアの協力により、震災の翌月にはその希望が実現しました。福興市は単に経済を再生するだけでなく、安否確認そして住民たちの再会の場にもなりました。

現在も福興市は毎月最終日曜日に、継続して開催しています＝写真。継続しているのは、自分たちの手で町を復興させるという、地域の強い信念と全国からの温かい応援があるからこそです。

どんな状況に置かれても、この町の歴史や文化、そして暮らしを取り戻そうと走り続ける「人」がいる限り、地域は動き続けます。この町に暮らす子どもたちに、希望に満ちた未来へのバトンを渡すため、私たちは走り続けていきます。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

東京新聞
2012年（平成24年）10月19日（金曜日）　11版　4

東北復興日記 11

南三陸再生 見届けて

南三陸町産業振興課
商工観光振興係主査
宮川舞さん

「もう復興していると思ったのに…」。東日本大震災後一年を過ぎたころから、初めて宮城県南三陸町を訪れる方々はこのような感想をおっしゃいます。ここにいる私たちでさえ、日々薄れゆく記憶。近い将来直面するだろう厳しい現実を思わずにはいられません。

日中は、国内はもとより世界中からの支援、視察、取材など多くの方々や車が行きかい、ある意味にぎわいが戻ったような錯覚にもおちいります。町外からの訪問者により、仮設商店街や被害を免れた宿泊施設などがにぎわう一方、公園で白球を追いかける子供たちの歓声や、昼下がりに雑談する町民の笑い声はほとんど耳にすることはなくなりました。二千世帯を超える仮設住宅は、町内外に四十数カ所にのぼり、以前のコミュニティーが維持されていないのが現状です。

それでもこの町に生きようとする住民は南三陸町の再生を信じて、復興に向け日々奮闘しています。今ある資源を生かして手作り品の販売を通じ地域情報を発信する女性たち、二度とこのような被害を繰り返さないようにと、この震災からの学びを語り継ぐガイドの方々、自身の仕事の合間を縫って地域イベントを切り盛りする店主たち。そのひとつひとつの「生きる力」が束になって、復興に向かっていくものだと思います。

ぜひ一度皆さんにも町を訪れていただきたいと願います。現在町には震災当時、そしてその前後の南三陸町について語るガイドが十人います＝写真。その話を聞いていただき、自然の脅威を感じるとともに、この震災から立ち上がろうとする「生きる力」を感じてほしいのです。そしていつか被災地から復興地へと歩みを進めた時、私たちの歩みを皆さんにも見届けてほしい、それが私たちの願いです。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

東京新聞
2012年（平成24年）10月26日（金曜日）　11版　4

東北復興日記 12

未来志向の思い共有

クレアン社長
園田綾子さん

「東北から日本の未来をつくっていきましょう。女性の活力を最大限発揮すれば、命を大事にする社会へと変えられるはず…」。NPO法人女子教育奨励協会の木全ミツ理事長のあいさつで、結結プロジェクト第四回車座交流会は始まりました。被災地に住む地域のリーダーたちと私たち首都圏の女性の交流会。これまでにつながりをもった人は百人を超えています。

今回は、十月十九、二十の両日、宮城県南三陸町と大崎市で開催。東北から三十七人、首都圏から二十八人の合計六十五人が集まりました。

初日はまず南三陸町志津川地区を訪問。津波被害を受けた市街地には町の記憶をとどめたいという思いで作られ、町のあちこちに立つ「きりこ」を前に胸が熱くなりました。

夜は東北からの参加者によるリレー形式の報告会。十人を超える方に活動や思いのたけを語っていただきました。

二日目のワークショップ＝写真＝では、六グループに分かれて地域の課題について討論。冬も水を張り、微生物や水鳥たちと共生する「ふゆみずたんぼ」の輪をどうやって広めていくかなど活発な意見が交わされました。「未来につながる今日を生きる必要があると気がつきました」「魅力ある町づくりのためには、地域を愛し、夢を持って行動する人づくりがポイント」など未来志向の発言が相次ぎました。

最後のプログラムは、大崎市ならではの秋の風物詩である渡り鳥のマガンのねぐら入りの見学でした。約六万羽のマガンが夕日の中で蕪栗沼に帰ってくる様子は、言葉を失うぐらい大迫力で素晴らしく、本当に自然の雄大さと美しさを感じずにいられませんでした。

別れ際、東北からの参加者の方々が、明るい笑顔で帰路につかれたことが主催者の私たちにとっては何よりでした。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

東京新聞
2012年（平成24年）11月9日（金曜日）　11版　4

東北復興日記 13

稲を刈り「ほにょ」作る

MS&AD
インシュアランスグループ
ホールディングス
総務部課長
山ノ川実夏さん

「ほにょ（穂仁王）」という言葉をご存じでしょうか。一本のくいに稲穂を積み上げていく天日乾燥の方法で、くいが田んぼに立つ様子を仁王様に見立てた呼び名です。十月上旬、宮城県南三陸町志津川熊田地区にある田んぼで稲刈りをお手伝いして知った「ほにょ」。指導役のNPO法人「田んぼ」の岩渕成紀理事長の「米作りは文化」という言葉に、深く納得しました。

田んぼは、海岸線から三・五キロ内陸にありながら津波が到達し、車や船、破壊された家や生活用品が大量に流れ着きました。二〇一一年夏、私が、九週間にわたって、たちの会社の社員百四人、約五千五百平方メートルの田んぼのがれきを撤去し土をふるいにかけ、多様な生き物が生息する「ふゆみずたんぼ」に再生するお手伝いをしました。

冬でも田んぼに水を張ることで津波の塩分が沈殿し淡水化が進み、今年六月には、六十九人の社員と家族が参加してササニシキの田植えを行いました。ひと夏の間、太陽を浴びた稲は、海からの養分と生き物たちの力を借りて、肥料・農薬を使わずに立派に育ち、今回の稲刈りを迎えました。七十七人が地元の皆さんに教わりながら、楽しく稲を刈り、「ほにょ」を作り上げていきました＝写真。

ふゆみずたんぼの力を目の当たりにし、日本の伝統的な稲作を学んだことで、社員はみなお米一粒の価値をあらためて実感し、田んぼに深い愛着を持っています。そうした思いを尊重し、今後も南三陸町の田んぼに関わり続けていきたいと思います。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

東京新聞
2012年（平成24年）11月16日（金曜日）　11版　4

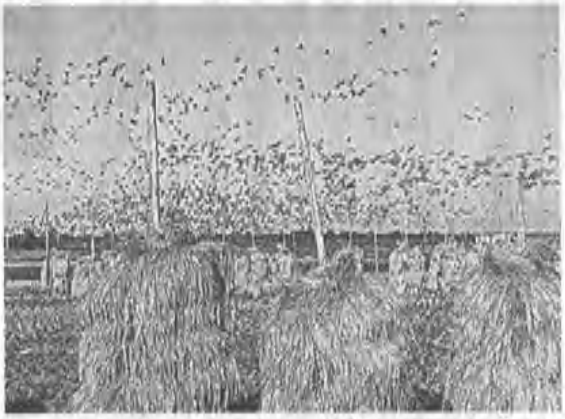
東北復興日記 14

渡り鳥と農業の共存

一ノ蔵
マーケティング室長
山田好恵さん

「よくけってきてけだっちゃね」。稲刈りの手を休めながら農家の人たちは空を見上げ、渡り鳥を出迎えます。毎冬九月末ごろからマガンなど渡り鳥が四千キロ離れたシベリアから宮城県大崎市の「蕪栗沼」に飛来します。最盛期には十万羽を超えるほどです＝写真。

かつて沼で越冬する鳥は毎年一万羽程度でしたが、年々増え、ねぐらや餌場の分散が急務となりました。そこで、二〇〇三年から沼周辺の水田二十㌶で冬も水を張る「ふゆみずたんぼ」が始まり、その水田は農薬や化学肥料を使わない農業に転換しました。〇五年にできました。湿地を保全するだけでなく農業という営みとの共存は貴重です。



蕪栗沼と周辺水田は「ラムサール条約」に登録され、豊かな自然が育まれます。

私たちはこの取り組みに感動し、有機米ササニシキを仕込んだ純米酒「ふゆみずたんぼ」を〇七年九月に発売しました。以来、多くのファンの方たちが渡り鳥の到来と、このお酒ができあがることを楽しみにしてくださっています。

昨年、大崎市は「蕪栗沼ふゆみずたんぼプロジェクト」を始めました。震災後の今だからこそ、人と人、人と自然や生きものが共生する暮らし方・生き方を東北から発信していこうという趣旨です。ふゆみずたんぼは南三陸町や塩釜市の津波被害を受けた水田の再生にも効果を発揮し、今年お米を収穫することができました。

十九日から二十五日まで、東京・丸の内の新丸ビルで、取り組みを写真展などで紹介するイベント「ふゆみずたんぼネットワーク―里・海の美味で東北復興！」が開催されます。ぜひ、足を運んでください。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。

東北復興日記 15

「話す場」で絆を育む

NPO法人
おおさき地域創造研究会
事務局長
小玉順子さん

「日常できていないことは、非常時にはできない」。阪神大震災を体験された方から伺った言葉が頭から離れません。

あなたは「いざ」というときに頭に浮かぶ地域の人は何人いるでしょうか。「足が悪くてねぇー」と買い物にも困っているひとり暮らしのおばあちゃんや、いつも元気にあいさつしてくれる幼稚園の男の子とお母さんなど、どうしているかなと「気にかける人」たちです。いくらつながりを持ちましょう、連携しましょうと言っても、そう簡単にはつくれるものではないのはご承知のとおりです。

うれしいことに最近私の周りには、その「気にかける人」が増えてきています。宮城県大崎市で活動する私たちのNPO法人が開く「トークカフェ」に参加してくれる若者やお母さんたちです＝写真。今年三月から月一回のペースで「話をする場」を設け、八回になりました。「話を聞いてもらった」「何かを決めるわけでない話は楽しかった」など、人と話すことが不思議な魅力になっているようです。まずは続けてみようと始めたこのトークカフェですが、参加者が毎回二十人を超え、若い人を中心にさまざまな年代の方が参加してくださっています。

大きな震災を機に、地域の人とつながりたいと思う気持ちが強くなった今だからこそ、「話す場」が必要なのかもしれません。具体的なアクションも見えてきました。学生が立ち上げた交流の場「From大崎」の開設や、チーズづくりでプチ起業した女性、フリーペーパー創刊など。一年に満たないこの「話す場」が、人と人がつながり、何かを始めるプラットホームとなってきたようです。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。